

全小国研会報

No. 9 9

発行所
全国小学校
国語教育研究会
事務局
八王子市立
由木西小学校
事務局長 植杉義久



全国小学校国語教育研究会
会長 長 沼 正 城

「深い学び」に目を開く山口大会

「人生は出会いである。よき研究者との出会いで生きがいの発見ができる」とは、全小国研草創期の功労者のお言葉です。その通りの盛会の大会を、近代日本の扉を開いた山口において開催することができました。「未来を拓くたくましい山口っ子」を育む山口県教育委員会教育長 繁吉健志様や、「夢・絆・笑顔で未来を紡ぐ」をキーワードに地域一体を進める山口市教育委員会教育長 藤本孝治様にご支援をいただき、実り多い大会にすることができました。また、文科省初等中等教育局教育課程課教科調査官 大塚健太郎様には、二日間におわたり日程を全てご覧いただき、ご指導を賜ることができました。特に「深い学び」という果実を得るためには、何が必要なかを改めてご示唆いただきました。

さて、実践発表の分科会では活発な質疑応答が展開されていました。ある分科会で足が止まりました。対象児を決め、その見取りを根拠とし、実証的に検証し発表されていました。その発表者は、「授業後に改めて児童の学習シートを見たときに、子供の発言のよさに気付いていない自分があった」と振り返りの弁。それを受けて、熊本からのベテランの参加者は、「私が若い頃、先輩から『子供の発言をどう聞いているの?』と言われた。当時は一生懸命に発問ありきの授業をしていた。果たしてそれが学級全体の深い学びとなる発問だったのだろうか。...。さらに見取りはできていたのだろうか。...。」「見取りの質をいかに高めるか」との難問に、互いに実践を真摯に振り返り、子供愛とばしる。『教師魂』の交流に感銘を受けました。

今回の特別講演は作家・重松清氏。演題は「言葉の力」。その要旨は、一言で言えば「想像力を豊かにして生きる」と受け取りました。深い学びの先には、「豊かな想像力」、そして「人間力」の高まりがはつきりと見ええました。それが「言葉の力」の意味となり、「言葉とともに生きていく」ことでしょう。最後になりましたが、今大会を大成功に導いてくださった山口大会実行委員会の方々に深く感謝申し上げます。今回の成果をご参会の同志によって、全国各地に広がることを願います。(東京都清瀬市立清瀬第四小学校校長)



第五十四回山口大会を終えて
大会実行委員長
間 恵 満 貴

昨秋、第五十四回全国小学校国語教育研究大会を本州最西端の山口県で開催し、全国各地から多数のご参加いただき、大盛況のうちに幕を閉じることができました。山口県では本大会を開催するにあたり「小中高を貫く言葉の学び」国語科における「深い学び」とは何から」という研究主題を設定しました。「小中高を貫く」という共通理解のもと、異校種間の連携を進めてきました。また、「深い学び」という共通理解のもと、異校種間の連携を進めてきました。また、「深い学び」については、「言葉の力で貫く」「子供像で貫く」「教師の働きかけの意図を意識させながら表現上の工夫について考えたくなる学習課題や問いを設定すれば、児童生徒は自身の言葉による見方・考え方を働かせ、課題を解決しようとする言語活動の過程で言葉の働きに対する認識、感性の深化、変容が起これり」「深い学び」の実現が期待できる。」という仮説のもと、研修を深めて参りました。

本大会の一日目は小中高の合同開催とし、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 国立教育政策研究所教育課程調査官・学力調査官 大塚健太郎様からご講演をいただき、学習指導要領の趣旨の実現に向けた国語科の「深い学び」の在り方についてきめ細かなご指導をいただくことができました。そして、ご存じの通り、作家 重松 清様には体調不良のため、当日のご講演をしていただくことができませんでしたが、温かいメッセージをいただき、会場の皆様から聞いていただくことができました。また、大変急なお願になりましたが、中学校実行委員長 河辺氏との対談をお引き受けいただきました。中原中也記念館長 中原豊様には、感謝の気持ちでいっぱいです。中原中也のふるさとである山口の地で中原中也の世界観を感じることができました。

二日目は県内から三名の先生方に授業公開をしていただきました。子供たちが言葉にこだわり、真剣な表情で学ぶ姿を見せていただきました。また、研究発表分科会では七分科会に分かれ、県内外の十四名の先生方から貴重な研究発表をしていただき、各分科会において深まりのある協議が行われました。本大会二日間を振り返り、ご参加いただいた先生方からそれぞれの経験に基づいた貴重なご意見をたくさん聞くことができたことを本心にうれしく思います。特に参加していただいた若い先生方の中に「国語って楽しいな」「国語を研究してみたいな」と思ってくださいました方がいらつしやうとしたら、それはとてもうれしいことです。

結びになりますが、長きにわたり本大会開催に向けご指導をいただきました全国小学校国語教育研究会 長沼 正城 会長様をはじめ、本部役員の皆様、顧問、参加の皆様、本場にありがとうございました。また、「オール山口」としてご協力いただいた県内各支部の支部長様をはじめ役員、スタッフの皆様、そして本大会に関わってくださいました全ての皆様にご心より感謝申し上げます。山口県はこの大会の成果と課題を財産とし、これからも前向きに研鑽に努めていきたいと思えます。(山陽小野田市立須恵小学校校長)

第五十四回全国小学校国語教育研究大会 山口大会

第三十四回中国地区中学校国語教育研究大会 山口大会

令和六年度山口県高等学校教育研究会国語部会研究大会

基調提案

発表者 下関市立うつい小中学校 校長 川口 寛

一 研究主題

小・中・高を貫く言葉の学び
— 国語科における「深い学び」とは何か —

二 研究主題の意図 くなぜ「小・中・高を貫く言葉の学び」なのか

子供の立場から見れば、言葉の学びは連続している。小・中・高が互いを
知ること、将来にわたって生きて働く言葉の力を育てることが出来る。
私たちは、「貫く」をキーワードに、小・中・高をらせん状に行き来する学
びを目指し、研究をスタートさせた。

三 研究仮説

まず、「国語科における深い学び」を次のように定義した。

児童・生徒が教材の言葉に着目し、自身の言葉による見方・考え方
を働かせながら、対象と言葉、言葉と言葉の関係を捉えたり、問い直
したりすることで、言葉の働きに対する感じ方や認識が深化・変容し
ていくこと。

さらに「表現者の言葉」について、「表現者の言葉には意図がある。その
意図は、言語内容と言語形式をあわせもった表現上の工夫に表れる。」と捉
え、「深い学び」の実現を図るために、次の仮説を立てた。

児童・生徒の興味関心と教材の構造を踏まえ、表現者の意図を意識さ
せながら、表現上の工夫について考えたくなる学習課題や問いを設定す
れば、児童・生徒は、自身の言葉による見方・考え方を働かせ、課題を
解決しようとする言語活動の過程で、言葉の働きに対する認識、感性の
深化・変容が起こり、「深い学び」の実現が期待できる。

四 「国語科における深い学び」が生じる三つの過程

例えば、『わたしと小鳥とすずと』（金子みすゞ）を教材として授業をす
る際に、言語内容（個性や平等の大切さ）のみを問う授業では道徳の授業
となる。言語形式（擬人法などの表現技法）のみを問う授業では、子供た
ちの認識は変容しない。いずれも「深い学び」は生じない。

表現者の意図は、言語内容と言語形式をあわせもった表現上の工夫に表
れる。表現者は言葉を選び、読み手自身の感じ方が生じるように働きか
け、「変容」「深化」を促すのである。

その「変容」すなわち「深い学び」は、三つの過程を経て生まれる。

- ①すぐれた表現者の言葉と、子供たちが直に出会う過程
- ②他者である友達、教師の言葉と対話する過程
- ③問いを追求する過程

これらの過程のなかで、特にポイントとなるのが「表現意図」に着目さ
せることである。教師は「言語内容の問いを、言語形式への気付きで答え
る」よう展開する。子供たちの思考の流れに沿って、教師が問い返し、思
考を揺さぶり、認識が変容し、学びが深まっていくのである。

五 「小・中・高を貫く」三つの視点

私たちは、三つの視点で「小・中・高を貫く」ことを提案する。

国語授業だからこそ、言葉そのものに、その人のものの見方・考え方を
見出すことを学ばせたい。それは、子供が表現の工夫、すなわち言語形式
を発見し、言葉の力を実感することで実現する。そのような「言葉の力」を
共通の視点にし、小・中・高の国語授業を「貫く」のである。

また、目指すべき子供像を具体的にイメージし、学びをつなぐことが必
要である。子供たちが何をどのように学んできたかを知った上で、学習指
導要領に系統的に描かれた学びの姿を、目指す子供像とし、小・中・高で
「貫く」ことが大切である。

さらに、子供たちが教材に対する感想を交流したり課題について考えた
りする際の、教師の問い、価値付け、評価などの「教師の働きかけ」を研究
することについても、小・中・高で「貫く」ことが大切である。

◆記念講演Ⅰ◆(要旨)(山口市産業交流拠点施設 KDDI維新ホール)

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官 学力調査官

大塚 健太郎 様

演題 「学習指導要領の趣旨の実現に向けて」

『深い学び』を実現する国語科の授業づくり」

一 学習指導要領の趣旨と深い学びの実現

学習指導要領全面实施から五年目を迎え、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に整理された資質・能力については、どの校種でも浸透してきた。今一度、「なぜ三つの資質・能力を育成するのか」という背景について考えるところにも、国語科教育における「深い学び」を実現するための授業づくりを進めていくことが大切である。

日本財団「十八歳意識調査(二〇二四年)」によると、二〇一九年の同調査よりも日本の全体的な数値が上昇してきている。自分のしていることには目的や意味があるかということについて、自分自身を肯定的に捉えている子供が増えていることが調査結果に表れている。しかし、読書離れや新聞購読率の低下に伴う情報収集の偏り、SNSの発達による短い情報での意思疎通の増加による公的な場での言語能力については懸念される。言葉の扱い方や発信の仕方など、自分の考えを正確に伝えることができる人材の育成に注力していかなくてはならない。

このような背景から、子供たちが自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協力しながら様々な社会変化を乗り越え、持続可能な社会の作り手となることができるようにしていかなくてはならない。社会のインフラを意識した上で、国語科教育においても、三つの力をバランスよく育成していくことが今後重要になってくるだろう。

二 国語科における主体的・対話的で深い学びと授業づくり

「主体的・対話的で深い学び」とは、固定的な学習形態があるわけではなく、資質・能力を育むための授業を改善していくための視点の一つである。

子供が主体となって学習を進めていくためには、その学びが「自分にとって有益だ」と興味をもつことができるようにする必要がある。興味のあることに対する取組の過程で、必然的に他者と対話する状況が生まれ、その

重要性や有用性に気付くことができるだろう。また、自ら主体的、対話的に学習に向かうことによって知識を相互に関連付けてより深く理解したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」を実現することができるだろう。

国語科の目標は、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成すること」である。目指すべきは、指導事項に示す資質・能力を育成することであり、授業内での言語活動を通して、言語能力を育成する必要がある。そのためには、教材研究とともに言語活動研究も重要であるため、国語科における資質・能力が育まれるかどうか、どのような対話が生まれてくるかということも意識した上での授業づくりが求められる。

三 指導と評価の一体化

必要な資質・能力が育成できているかどうかを評価する際には、指導事項の明確な把握が必要不可欠である。単元の目標に応じた評価観点の選択と評価基準の具体化した上で、子供の学習状況に応じた評価方法の工夫が求められる。

学習の中で行われる評価では、子供同士の相互評価や教師からの適切なフィードバックを通じて、学習改善を促進していく必要がある。評価の結果を次の学習指導に活かし、子供の粘り強い取組を支援する循環的な指導の実現を目指す。

四 今後の展望

一人一台端末を活用することで、従来は散逸しがちだった学習の成果物や振り返りをデジタルポートフォリオとして保存し、過去の学習との比較や成長の確認をすることが容易になった。これにより、子供自身が自信をもてるような記録媒体となりえることを理解し、活用していくことに期待したい。また、アンケートフォームの作成や取材時の電話連絡など、実践的なICT活用を通じて、個別最適な学びと協働的な学びの両立を実現していくことが重要である。

教室内では異なる進度や方法で学習を進める子供が、互いの活動を尊重しながら学び合う環境が構築されてきている。子供が自立的に学んでいるという姿を目指して、教師自身も、子供に対する見方・考え方を働かせながら毎日の授業づくりに取り組むことが求められる。

【文責 大塚祐亮】

◆記念講演Ⅱ◆(要旨)〔山口市産業交流拠点施設 KDDI維新ホール〕

中原中也記念館 館長

中原 豊氏

周南市立須々万中学校 校長

河辺 哲也 氏

演題「中原中也の詩の魅力―『中也読本が開く扉』―」

一 重松清氏のメッセージ

重松清氏が体調不良により緊急入院し、講演が中止となった経緯が説明された。代読者の池永あゆみ教諭により、重松氏からのメッセージが読み上げられ、山口との深い個人的な繋がりがや小郡町での思い出が語られた。特に中原中也の詩「帰郷」を引用しながら、故郷の持つ二面性(厳しさと優しさ)について深い考察が示された。

重松氏は国語教育の重要性について言及し、教師たちが生徒の将来の思い出を作る重要な役割を担っていることを強調した。特に、国語の授業が児童・生徒たちの心の居場所となり、優しさを育む場となることへの期待が述べられた。

二 中原中也の詩の魅力について

中原中也記念館館長の中原豊氏と河辺哲也校長による対談が行われ、「サーカス」の詩を例に、中也の詩の特徴が解説された。特に三歳児の朗読映像を通じて、詳細な分析がなされた。

言葉の読み方や意味が理解できない三歳の子供であるはずが、一生懸命楽しそうに「サーカス」の詩を朗読していた。三歳という年齢は面白くないか面白いかということに敏感な時期である。なぜその時期の子がこの詩を口に出して、読みたくなったのか。そこに中也の詩の魅力が詰まっている。

この詩の大きな特徴はリズムにある。「ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん」以外はすべて綺麗な七五調。さらに、同じ言葉が繰り返し用いられることでリズムを作り出している。このリズムが声に出したとき、聞いたときの心地よさを作り出している。「サーカス」が書かれた当時、七五調は古いと評価されるものであったが、中也はあえて七五調を用いた。詩というものは大衆との合作になるものであるという中也の読み手を意識した考えが、このリズムに表れている。

リズムの他にも「ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん」のような擬態語の面白さもこの詩の特徴である。他の詩人では出てこない、揺れるような不

思議な言葉。中国語でブランコが揺れる音を似たような音で表すが、それを知っているかのような言葉選びが面白い。この言葉一つから文化的な背景までつながっていくことも詩を読む魅力である。

私たちは詩を読むときに、何が書かれているか、どういう意味か考えるが、三歳の子供が読むときのように、言葉を楽しむこともまた、詩を楽しむ姿である。

三 中也読本の教育的活用

中原豊氏により、中原中也記念館が制作した「中也読本」の教育現場での活用について、中也読本の中から「月夜の浜辺」を用いて説明がなされた。

「月夜の浜辺」を中学校の授業で扱う際「どうしてボタンを捨てられなかったのだろう」「ボタンが象徴しているものは何だろう」と聞きたくなる。詩の中では「捨てるに忍びず」としか書かれていない。そこで中也の人生を調べ、当時の中也とこの詩を重ね合わせもう一度読み、当時の中也の思いに浸ることも詩の読み方としてはよいが、ここで終わってしまったのは、かえって子供と詩を遠ざけてしまう。作者はこの詩の正解を全て統括している存在ではなく、作品の向こうで言葉を受け止める読者を意識して作品を書いている。だからこそ、言葉そのものを私たちがどのように受け止めるかが大切になってくる。言葉を受け止める感性を豊かにしていかなければならない。何十にも折り重なった織物の糸のように、詩の言葉一つ一つを手繰り、織り込まれた意図をほどこき、自分の中の詩のイメージを作っていくてほしい。

中也の詩で授業をする際は、言葉、七五調のリズム、擬音語、繰り返しなど様々な技法を用いて「音」を大切に詩人であることを心に留めておきたい。また、中也の言葉を受け止める、言葉のこちら側を豊かにすることを感じ取ってもらいたい。

『中也読本』は、当初は山口市内の中学生全員への配布から始まった。現在は図書室での活用形態に変更された経緯が説明された。さらに、デジタル版の開発状況や、生徒たちの感想を取り入れた編集方針について詳細な説明がなされた。

最後に、中也の詩「吹く風を心の友と」の朗読で締めくくられた。

【文責 市川景一朗】

◆授業・協議会①◆ 「KDDI維新ホール・二〇一会場 第五学年」
単元名 「海のいのち」はあなたに何を語りかけてきたのか

授業者 周南市立今宿小学校 有田 友萌 先生

一 提案の概要

小学校六年生では、本教材「海のいのち」を通して、叙述を基に解釈を交流し、作品が強く語りかけてきたことについて自分の考えをまとめることを目指す。

こうした活動に取り組むことにより、中学校での、文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えることにつなげていきたい。さらに、作品について自分の考えをまとめる学習に取り組むことで、文章を考えて広めたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見をもつことができるだろう。

二 研究協議

Q 児童の一人が「視点」という言葉を使っていた。自分なりの視点をもつて話し合いが行われたように感じるが、これまでの授業で「視点」をどのように扱っていたのか。

A 特別に視点という言葉を使って授業をしているわけではない。「注目」や「着目」という言い方を普段からしている。

Q 学習課題「誰の顔が頭に浮かんだのだろうか」はどこから考えたのか。

A 児童の「なぜクエを打たなかったのか」という疑問から考えた。日頃から比較的単純な選択型の課題と、児童の思いがより入った判断型の学習課題を課題として分類し、授業を実践している。

Q 今回の授業における言語形式について知りたい。

A 自分自身が言語内容と言語形式の捉えが曖昧。だからこそ、子供が着目したことを捌ききれなかったと思う。

Q 「殺そうとした、殺さなくて済んだ」の部分を発問として取り上げるだけでなく上手く流れたと思う。今回の発問をした意図を聞きたい。

A 指導案からのずれを導入から感じていたが、指導案どおりの授業にしたいと思い、今回の発問を行った。発問の意図については、「海のつながり」を大切にされたかったので、共通点が出る授業の流し方にした。

Q 太一がクエを打たなかった理由をどう考えているのかを聞きたい。

A 児童の中から「太一の夢はおとうと海に出ることで、おとうと同じように考えているクエを打つことは海からおとうが消える」という意見があった。その読み方にハツとさせられた。

Q クエを打たなかった理由にはたくさんさんの要因がある。今回の発問では、

太一の中で一番大きな存在であるおとうのを中心に児童が考えていた。一つの場面を切り取るだけでなく、様々な場面を振り返ると太一の心が変化した理由を様々な人から捉えることができたと思う。

A 判断型の発問にしたのは、自分の思いをもちやすいという考えから。今回の発問を通して、子供には場面を繋ぎながら考えてほしいから。今

Q 母と与吉じいさの意見があまり出なかった。自分なら前の段階で太一とクエの関係について授業をする。村一番の漁師と本物の漁師の違いの中で、誰の顔を思い浮かんだかを発問にするとよかったと思う。

A 単元構成の中で太一について深く掘り下げたことはしていなかった。これをしてあげば、話し合いの視点が明確になったかもしれない。

Q 太一について二時間取り上げ、背負っているものを明らかにしながら終末に向かうと、私たちの考える表現の形式に繋がったかもしれない。

A 太一の周りの人物像を読むことで、太一の人物像を出させたかった。

Q 発問に対する答えの決め手が、教科書から見付けづらい印象を受けた。

A 国語をみんなで読む楽しさは人の意見を聞けることだと考える。解釈の共有から、話し合いが楽しめるような授業をこれからもつくりたい。

Q 判断型のデメリットは考えの幅が狭まること。今までの授業の積み重ねがあるので、今日は選択肢を与えずに自由に考える方が意見をたくさん出せたのではないかと。

A 選択型でない発問でも児童は考えることができたと思うが、大会の提案性として新しい視点を作りたかった。

三 指導助言

下関市立宇賀小学校長 三井 竜彦 先生

今回の指導案のポイントは「太一がクエを打たない決断をしたときに、誰の顔を思い浮かべたか」という発問である。本教材を読み取る際に三つの疑問が浮かび上がってくる。①太一がクエを探した理由②太一がクエを殺さなかった理由③「もちろん太一は生がいたらにも話さなかった」の「もちろん」の部分。①については、情景描写やクエと対峙したときの太一の発言からクエを倒して強さを見せつけた太一の気持ちを読み取れる。②については、「泣きそう」な太一が「ほほえむ」様子から、誰かの声を聞いて考え直す太一の様子が読み取れる。③については、クエを逃すことでおとうを越えた太一が父への敬意を込め、周りに悟られないために「もちろん」誰にも話さなかったのだ。以上の教材分析を踏まえた上で、今回の「誰の顔が頭に浮かんだのだろうか」という発問がともよかった。

◆授業・協議会②◆ [KDDI維新ホール・二〇五会場 第六学年]
 単元名 詩を味わおう「私と小鳥と鈴と」

授業者 山口市立湯田小学校 由利 浩志 先生

一 提案の概要

本実践では、教材「私と小鳥と鈴と」を通して、私と他を比較する詩の構成に着目し、詩にこめられた作者の思いについて自分の考えをまとめることを目指した。そのために、「できない」と表現されているのに、「できる」が伝わる工夫や、本文と題名の順序の違いなどに着目させることを手だてとした。それらの読み取ったことをつなぐことで「そのままの自分でよい」や「自分を励ましているような詩」という詩のメッセージに子供たち自身が気付いて欲しいと考えた。

二 研究協議

(一) 質疑応答

Q 文学からメッセージを読み取ることを、これまでどのくらい学習で取り上げてきたのか。

A 『帰り道』では、登場人物の変化からメッセージを読み取る経験をした。

『せんねんまんねん』という詩では、繰り返しの意図を考える学習に取り組んだ。そして、題名や繰り返し表現から長い歴史への気付きや詩のメッセージについて読み取ったことを話し合った。

Q 慣れない会場ではなく、普段と同じ学級で授業を行ったとしたら、どのような対話の活動を仕組んだか。

A 日頃からペア学習が多い。五秒、十秒の短時間で様子を見ながら行っている。基本は「誰とでも話せるように」という配慮をしている。安心して話せる相手としか話さない実態もあったので、教師が意図的にいろいろな人と関わるためのルールを設定することも大切だと思う。

Q 授業で、普段からどのような振り返りを行っているか。

A よく用いる振り返りの観点は、「友達のどんな発言が心に残ったか。」である。これは、自分の考えとの比較を促すためのものである。本時は前時との変容を見たかったので、時間があれば「前時の感想と比較して、自分の考えがどう変わったのか」を振り返らせるつもりだった。

(二) 協議①く深い学びはできたか

○日頃からの学級経営のよさもあると思う。子供たちが言葉に着目できているのがすばらしい。「それから」にこだわって辞書も引いていた。

○一つの読みではない違った読みへの挑戦が見られた。主語や言葉の順序に着目し、そこから読みを広げて伝え合うという意味のある活動だった。

特に「それから」という言葉について授業者が押さえ、そこから子供たちが読みを進め、考えが生み出されたところがよかった。

(三) 協議②く自分ならどう指導するか

○「それから」「みんな」のずれについて話し合いたい。また、前時に金子みずぶの他の詩を扱いたい。

○音読を大切にされている学級なので、音読した後、どこが心に残ったのかを問うてはどうか。おそらく「みんなちがって、みんないい」があげられるので、その前の一行「それから私」に着目させたい。

○引っかけたのは言葉の順序で、最後が「私」。ここに子供たちがこだわっていた。この順序になる必然性があると思う。「私と小鳥はちがう」「私と鈴はちがう」とあるが、鈴と小鳥は比較していない。「鈴と小鳥と、そして私ともちがう」ということから、「みんなちがって、みんないい」という表現につながっている。ただ、分析読みではなく、「ここ、好きだね」ということを大切にしたい。

○詩を分析的に扱わずと詩のよさから離れてしまう。感性、理性、知性の三つのうち、詩は感性だと思ふ。この詩をまるごと受け入れるのがよい。詩への没頭を大切にしたい。

○子供たちは感性を働かせて読んでいた。最後の手だてで悩まれたということなので、代案として、①「個性の尊重でくるのではなくて」を言わなくてもよかったのでは。②メッセージに子供の目を向けさせたいなら、課題設定の段階で子供の思いを高める必要があった。形式でいくなら新たな気付きを問い直す。どちらかに絞りたいかった。

三 指導助言

元公立小学校長 伊藤 豊 先生

国語科における深い学びを実現するための六つの誓い(視点)を示す。

① 一年後(学年末)の姿を見通す。大事なことは「自分の国語教室を作る」ことである。②常に言葉の力の「今」を見取る。座席表やタブレットを活用していくことも有効である。③言葉(表現)に着目させていく。言葉に対して自覚的になるよう、学習指導の創意工夫を図ることが大切である。

④学習者相互に関わらせる。意見のずれたときが話し合うチャンスである。

⑤基本的な言語活動の有効性を見直す。声に出して音読をすることで内容理解や様々な気付きにつながる。⑥学びの成果をふまえた授業づくり。大切なのは「教材で教える」ということである。

これからも「子供」を主語にして授業作りに臨んでいただきたい。

【文責 渡邊純治】

◆授業・協議会③◆ 「KDDI維新ホール・メインホール 第六学年」

単元名 筆者の工夫をとらえて読み、それをいかして書く

『鳥獣戯画』を読む 「発見、日本文化のみりよく」

授業者 宇部市立琴芝小学校 教諭 藤本 学志 先生

一 提案の概要

本単元は、「読むこと」と「書くこと」の複合単元である。筆者である高畑勲氏の書きぶりは実に独特で、『鳥獣戯画』の魅力伝える論の進め方や、体言止め・力強い断定・呼びかけなどの文末表現にも、読み手を引き付ける工夫が多く詰まっている。そのような表現の工夫を捉えてから、自分が書くことへと繋げることが出来る単元構成であるため、主体的に読み進めながら言語表現の力を獲得し、それを自分のものとして活用することができると考える。単元の初めに見通しをもたせ、「書き手」としての意識を常にもたせながら、読みの学習を進めてきた。最終的に書く活動につなげるために、本時では文末に着目させ、「筆者の主張や思いが文末にも表れている」という点に気付くことができるよう活動を設定した。筆者の主張や思いと関わらせながら文末表現を比較することを通して、二つの文章それぞれのおさや特徴をとらえることができることをねらいとし、本時の授業を行った。

二 研究協議

Q 筆者の本文と、指導者が文末表現を変えて用意した文章との二つを比較させる際、今回の三カ所を変えたのはどんな意図があったのか。

A 「筆者の書いた本文は、文末表現によって主張を強調している」ということに気付かせたいという意図があった。「最後の一文のみでいいのでは。」という意見もあるかもしれないが、それでは、全員が本文を選んでしまい、一方に偏って意見交流が活発にならない可能性があるかと予測した。「この部分は本文の文末表現がいいけど、ここは先生の書いた文章の方がいいと思う。」というように深く考えてほしいと思いい、三カ所を変更し比較させた。本時では、どちらか一方を選ばず「ここは言い切るべきだからこちらの方がいいと思うけど。」と迷っている児童もおり、ねらい通りの姿も見られたと考える。

Q 本時の後、児童がおすすめしたい物の紹介文を書かせるのであれば、強調の表現が必要になると考えられる。本時で扱った「問いかけ」の文末はどう使うことができると考えられるか。

A おすすめをする文章であるので、強調する言い切りの文末表現は多くないと考えている。ただ、本時の児童の振り返りを見ると「問いかけ

文章の初めに使ってみようか。」や、「行ってみたい。」など児童なりに考えることができていた。問いかけの文末を多くは使わずとも、それぞれの児童が意図をもって使うことができればよいと考えている。

Q 本教材は、主張に向かうまでの筆者の論の進め方も大きなポイントだと考える。本時では特に表現について着目していたが、論の進め方については触れているか。

A 単元計画に明記してはいないが、筆者が尾括型で書いていることについては二次の初めにおさえている。全体の構成や論の進め方の方に着目させた時間はないが、表現の工夫と全体の構成とのどちらにも触れながら学習を進めてきた。

三 指導助言

宇部市立上宇部小学校長 原 浩一郎 先生

この教材でどんなことを学ばせるか、その教材の特質をどのように生かしていくかを、教材研究を十分に行った上で考えるのが大切である。また、どのようにして説明文教材と子供たちとの距離を縮めるかが重要だ。子供たちが教材と自らの関わりをつくれるように読ませることが大切。本時のように児童がしっかりと自分たちなりの意見を出していくということが、説明文を好きになることにつながるのではないかと考える。

本時の発問「どちらの文の方がいいだろう。」について、授業者はあえて具体的な発問は避けていた。その成果として、本時のねらいである「文末表現」に児童が着目し、自分たちなりの意見・考えをもつことができていた。文を比較し、印象の違いやよさについて話し合う活動については、五段落にある文章に一文ごとに着目していたように思う。そうではなく、五段落の文末表現を一連の流れで扱うことで、さらに筆者の工夫、読者の納得につながる部分を捉えられたのではないだろうか。

筆者の視点と自分が書くときの視点で振り返らせるといふ点については、「筆者の言い切りの書き方では誤解を生みそうだ。」と筆者の書きぶりに否定的だった児童が、発問について考えたり他の児童と意見交流をしたりして、授業最後には「誤解をうむことはなさそうだ。」と変容していた。授業者がねらってこの児童を振り返りの発表者に指名することができておりよかった。

国語科は単元全体で力をつけていくものであり、本時の学習についても単元最後の書く活動までを終えたとき、その成果がみられるはずである。

【文責 奥野友美子】

◆研究発表分科会①◆ 「話すこと・聞くこと」

研究主題 言葉による見方・考え方を働かせるために

→ 単元をつらぬく話し合い活動を通して

提案者 萩市立椿東小学校 松原 麻衣子 先生

一 提案の概要

本実践では、単元二つの実践を通して、「話し合いを進める力」を身に付けることに重点を置いて指導をした。そのために、ICTを用いて話し合いの様子を撮影したり、話し合い進行表を用いてモデル動画と自分たちの話し合いを比較したりした。そうすることで、自分たちの話し合いを客観的に見ることができ、話し方や言葉の使い方を意識することができると考えた。また、話し合いの目的を明確化し、児童自身に自覚化させることで、自分事として主体的に話し合いを進めることができるように仕組んだ。

二 質疑応答

Q 学力が低位の児童への指導について

A 児童の気付きを少しでも多く価値付けた。また、司会等の役割ごとに集まって、役割を確認することで自信をもたせた。

Q 児童の見取りの仕方について

A 三つの教室に分かれて話し合いを行い、様子を撮影した。話し合いを文字起こししてもよかったと思う。

Q 話し合いのモデルについて

A 教科書に掲載されているモデル動画を使用し、自分自身の姿と比較できるようにした。また、モデルの原稿も配付することでモデルと自分自身の違いについて確認することができた。

三 指導助言

萩市教育委員会学校教育課 主幹 磯村 亜由美 先生

「話すこと・聞くこと」の単元において、児童の言葉は消えていくため、話し言葉を文字起こす必要があることもある。その方法の一つとして、児童同士のモニタリングが挙げられる。これは、低学年からできることなので、経験を積み重ねていくと効果的である。また、話し合いを行う前の事前準備が大切となる。話し合いの目的を共有し、児童が自分事として受け止めた上で取り組ませると良い。なんとなくではなく、意識的に言葉に関わらせ、「なにかちがう」ではなく、「なにがちがうのか」を言葉にするよう意識させていくことが必要である。

【文責 松村奈保】

◆研究発表分科会①◆ 「話すこと・聞くこと」

研究主題 言葉の力を高める「話すこと・聞くこと」の実践

→ 「関わり合い」を軸とした、

二つの言葉の力を高める国語科授業づくり

提案者 広島市立白島小学校 溝上 大樹 先生

一 提案の概要

本実践を通して、自分と他者の認識の違いを認め、「他者のよさに気付き、他者を認めながら学ぶ児童」の姿を実現したい。
そこで、「関わり合い」を意識しながら単元構成を工夫したり、目的意識をもたせる工夫を行ったりした。他者と協同しながら教え合い、学び合うことで言葉による見方・考え方を深めるとともに、既存の価値観が揺さぶられたり、新たな価値を創造したりすることにつながると考える。

二 質疑応答

Q 関わり合いのゴールを子供たちにどのように示したのか。

A 目指す関わり合いの児童姿を具体的に示したものを、各学級に配ったり、動画を通して説明を行ったりした。

Q 地域や保護者は実践どう捉えているか。

A 地域や保護者の反応が見られることは少ないが、地域学習において子供たちが積極的に話しかけたり質問をしたりすることを通してメモの質が高まっていた。

Q 学力が低位の児童への手だてや見取りについて

A 話し合いで積極的に発言することは難しいが、振り返りを通してどのように関わったのか見取り、価値付けを行っている。

三 指導助言

広島市教育センター指導主事 櫻田 真一 先生

目的をしつかり意識しているからこそ、児童が意欲的に参加する授業となる。また、グラウンドルールがあるため、相手を大切にしながら関わろうとする児童の姿が見られる。関わり合うことを通して、他者と協働して学ぶことのよさを子供たち自身が実感することができている。そして、国語科におけるこの「関わり合い」の姿を他教科・学校全体に生かしてほしい。国語科の資質・能力をしつかり身に付けさせてこそ日常生活に生きてくるし、日常生活に生きる中で国語科の資質・能力もさらに高まっていく。この積み重ねが、国語科における「深い学び」といえるのではないだろうか。

【文責 松村奈保】

◆研究発表分科会②◆ 「書くこと」

研究主題 小学一年生の一年間の「書く力」の発達

思考の強化と五つの継続活動

提案者 下関市立長府小学校 西本 充志 先生

一 提案の概要

言語は、音声言語と文字言語に大別される。小学校入学後、文字言語獲得過程(ひらがな)と、文字言語活用過程を経て学びを展開していく。「よりよく書ける」ために、イメージと思考(題材・テーマ)が大切であり、その基盤に書くことへの意欲がある。さらに書く技術が備わったとき、よりよく書ける深い学びに繋がると考える。そのための手だては、(一)実際に経験すること。(二)意欲と技術を高めるために五つの継続活動を行うことである。その五つの継続活動を以下に示す。①語彙を増やすこと②視写③短文創作④並べ替え活動⑤推敲である。この仮説を基に書く力の発達を追跡研究した。書く技術の個人差はあるものの、子供たちが楽しみながら、自分の考えをしっかりと表現できるようになった。

二 質疑応答

Q書くことと語彙力だと思いが、その手だてを教えてほしい。
A語彙を増やし、広げるために「しりとり」をさせた。例えば、「一人しりとり」「チームしりとり」「かたかな限定しりとり」などである。遊びの中で語彙を増やしていったことは、効果が大きかった。

三 指導助言

山口市立中央小学校長 富士本 武明 先生
言葉には、その場で消えてしまう「音声言語」と、後に残る「文字言語」がある。「文字言語」には深い思考と正確さが必要であり、感情の伝わりにくさがある。それでも人はなぜ「書く」のか。その理由は二つある。一つ目は自分の思いや考えを表現するために書く。そのために、「イメージ」をもって「思考」すること、「目的意識」をもつことが大事な要素になる。二つ目は、他者と思いを共有し、他者の心、考え、行動を動かすために書く。そのために、「相手意識」をもつこと、「語彙」を増やし、言葉を選択することが大事な要素になる。書くことの「伝わりにくさ」を自覚し、論理の重要性、構成への着目、推敲も必要になる。つまり、言葉による見方・考え方を働かせていくことだ。意図をもってよりよく書くことを繰り返すことにより、学びは深まり、書くことを楽しむ姿勢と汎用的な書く力を付けることが期待できる。

【文責 中田美奈】

◆研究発表分科会②◆ 「書くこと」

研究主題 実生活に生きる「書くこと」の学習指導

自ら書きたいことを明確にしていける児童の姿を求めて

提案者 千葉市立花園小学校 石井 桃子 先生

一 提案の概要

○作文あそび「へえ へえ えほん」(二〇一四年六月)の実践報告である。生活科の学校探検後、国語科で「へえ へえ えほんをつくろう」に取り組んだ。一番のお気に入りの教室を四ページ構成の冊子にした。○四枚のカードには、子供が書いた文に、「へえ」と相槌を打つ「へえ君」が印刷されており、相手意識をもって進められる活動である。○三枚目のカードには、教室から想像できることを書かせた。すると、意欲的に書く姿がみられ、三枚目のカードに個性が表れ始めた。○出来上がった本は友達同士で読み合った。友達との交流がさらに情報を引き出し、書きたい意欲を掻き立たせた。○絵本にするという取組から、情報の取捨選択、書き加えなど、自ら書くことに向かうことができた。

二 質疑応答

Q学習ペースの違いはどうしたのか。
Aその場ですぐに「どうしたいの?」「カードを写すだけでもいいよ。」と助言した。他の児童が自分たちで相談しながら進める間に、個別の対応をした。五十音表も準備した。

三 指導助言

山口学芸大学特命教授 上田 保明 先生
カードの視覚的な工夫(「へえ君」の顔の大きさ、マス目の大きさ、題名)や、子供たちに任せていく思考解決型、課題解決型学習が、子供たちが主体的に取り組めた要因だと考える。「書くこと」について、三つの事柄について触れる。一つ目は、時代が変わっても、教育は不変であり、時間が掛かるといふこと。二つ目は、「書くこと」の重要性、「書ける力」の再評価について、教師自身、子供を見る目を肥やすことが重要であること。三つ目は、子供に「書く力」を付けさせるために、視写をさせること、日常的に活動を取り入れること(日記指導再考など)、「読むこと」も重視し「読み・書き」の関連した指導をするといふ。言語力あつての表現力である。言語力を付けるために「書くこと」を大切にしてほしい。

【文責 中田美奈】

◆研究発表分科会③◆ 『読むこと』説明的文章・下学年』

研究主題 「書き手が主張を伝えるための表現の工夫」を捉える課題・
発問とは 「『ビーバーの大工事』の実践を通して」

提案者 柳井市立柳井小学校 荒井 尚子 先生

一 提案の概要

①バックワードデザインによる学習活動の設定

ゴール「動物の大工事を調べて一年生に紹介しよう」

→「紹介の仕方や書き方の工夫」「大工事とは」を筆者から学ぶ。

②言語形式に着目させる発問の工夫

「数字ではなく、『大きい』と書けばよい?」、「『ガリガリ』の『ガ

リ』は一回でもよい?」など。

③学習課題の工夫 「筆者の書き方で大工事だと感じるか?」

学習過程において、児童より、「数字が書いてあると、どれだけ大き
いかわかりやすい。」「ガリガリと繰り返ししているから、大工事の感じ
がする。」「人間には難しいから、すごい工事だと思う。」「などの反応が
あった。また、「一年生には『メートル』では伝わらないから、『〇〇先
生くらい』など、別の言葉で言えばいいんじゃない。」「と、ゴールを意
識して話し合う様子も見られた。

二 質疑応答

Q (発表者) 学習課題が有効であったか。

A (参加者) 「一年生に伝えるために」と子供たちなりに考えていたこと
が学びの深まりにつながったのではないか。メートルについてのやりと
りは、ゴールをしっかりと意識していたからこそだと思う。

A (参加者) 学習の流れの中で、大工事に視点をあてたことが、子供たち
の学びやすさになっていた。

三 指導助言

宇部市立厚東小学校長 西嶋 智 先生

説明文は読み手にわかりやすく書いてあるため、子供たちは言語内容
(説明内容)に問いをもちにくい。子供の主体的な学びにするためには、
内容理解を深めようとするのではなく、言語形式(説明方法)に関する子
供の問いをもとにした学習課題を設定し、授業を進めていく必要がある。
本実践のように「書き手の主張が伝わるのはなぜか」「一年生へ紹介する
ために、筆者から学んだ書き方の工夫を使って伝えたい。」という意識を
もたせるのは効果的である。

【文責 森本美和】

◆研究発表分科会④◆ 『読むこと』説明的文章・下学年』

研究主題 大はつ見! あなのやくわりはつびよう会をひらこう
順序立てて考え、自分の考えをもとうと

提案者 大阪市立加賀屋小学校 仲谷 倫典 先生

一 提案の概要

①学習材分析 文章構成を一覧にし、中に注目すると四つの共通点

○場所・もの ○役割 ○詳しい説明 ○便利・困難

②説明のアイテム

○観点 ○写真・絵・図 ○アイテム言葉

○図などとアイテム言葉を矢印でつなぐ『やじるし研究』

③言葉への意識を高める取組

○動作化 ○体験との結び付き ○自分の言葉に変換

○よい表現の提示

④「大発見! あなのやくわり はつびよう会」

二 質疑応答

Q 「大発見!」とされているが、みんなが知っている穴を紹介しているも
のもあった。目的は何になるのか。

A 当たり前のものになりがちではあった。ロッカーなど、どこまでが穴か
という議論もあり、何のための穴か説明できればよしとした。

Q (参加者) 自分の発見カードの中から、どれを紹介すれば読み手にとっ
ておもしろいかを考えさせたり、他の子供のカードを参考にさせたりす
るのもよいのではないか。

三 指導助言

大阪市立太子橋小学校長 栗山 功 先生

○言語活動の設定においては相手意識をしっかりとめさせる必要がある。
特に低学年の場合、活動に対するモチベーションへの影響が大きい。
○見つけた穴が、その後の言語活動に適しているか否かを考えさせ、最後
に説明できるかどうかを意識させる必要がある。
○『やじるし研究』や『例文の提示』のように、見て真似できるものがある
と、特に低学年は書きやすくなる。
○振り返りの際は、視点をきちんと与えなければならぬ。そうすること
で、学んだことや友達との関わりから振り返りができる。今回の発表者
は、適切な視点を与えていた。

【文責 森本美和】

◆研究発表分科会④◆ 「読むこと」説明的文章・上学年

研究主題 説明文における「深い学び」とは

「風船でうちゅうへ」の実践を通して

発表者 岩国市立川下小学校 石田 哲也 先生

一 提案の概要

○説明的文章において深い学びへと導くための手だてとして、説得の論法や認識の方法を設定した。

○人間の真理・真実を学ぶ「筆者の気持ちを考える授業」を設定し、同化・異化体験を繰り返す工夫を行った。

○説得の論法を学ぶ授業では、倒置法の効果を取り入れ、表現の工夫による効果をねらった。普段の書く活動で学習したことを使う場面を意識的に設定していくことが重要である。

二 質疑応答

Q 人間の真理・真実を学ぶことについて、道徳科との兼ね合いはどうか。

A 強く意識はしていないが、例えば文学的文章「注文の多い料理店」では、人間は欲によって冷静な判断ができなくなるなど、自然や人間のプラス面、マイナス面を押さえるようにしている。

Q 短作文の意図は何か。

A インプリントしたものをアウトプリントさせることが重要である。読んで分かったつもりになっている子供たちに、自分の言葉で説明できる力を付けるために日々実践している。

三 指導助言

元公立小学校長 磯村 勇 先生

○本教材は、専門家が分かりやすく説く一般的な説明的文章とは異なっており、教材解釈をしたり、読み方を構築したりする必要がある。

○「分かる」と「できる」は違う。よい作文の書き方を理解しても、書けるかと言われれば、必ずしもそうではない。「分かる」から「できる」に寄せていく手だてが、短作文作りであった。

○道徳科との兼ね合いについては、あきらめない筆者の心を議論すると道徳科になるが、筆者の表現の工夫を読み取って、子供たち自身が紡ぎ出した言葉であるなら、国語科として価値付けてよい。

○本単元は、今年度からの新しい教材である。学びから得た言葉を使ってどんなものか、見方・考え方を働かせていくか、教室での実践を期待したい。

【文責 三村祐子】

◆研究発表分科会④◆ 「読むこと」説明的文章・上学年

研究主題 自分の考えをまとめることができる児童を育てる

国語科指導の工夫

「文章を読んで理解したことに基づく指導を通して」

発表者 仙台市立柳生小学校 星川 彩 先生

一 提案の概要

○「自分の考えをまとめる」とは、筆者の主張や説明の工夫について、既知知識や理解した内容と結び付けて自分の考えを形成すること。

○自分の考えをまとめる指導の工夫として、全文シートを活用、比べ読み、デジタルスタディ・ログの活用を取り入れた。

○三つの手だてを入れた二年間の授業実践により、児童の変容を探った。
○児童の記述などから、比べ読みは考えを広げながら読むことに効果的であったと推察される。しかし、考えを深めながら読むことには課題が見えたので、さらなる具体策が必要である。

二 質疑応答

Q 複数の文章の比べ読みを取り入れた意図は何か。

A 「筆者の説明の工夫を読み取る」という観点で比べ読みを行った。共通点、相違点をまとめることで、共通点が重要と気付けた児童が多かった。また教材文と資料を読むことで、それぞれのよさが分かった。

Q 考えの深まりのよさを児童も自身が感じるにはどんな手だてがあるか。

A 観点ははっきりさせて、振り返りをさせること。協働ログを通して共有することや、教師からのコメントで気付くことができるようにした。今後は、どういう状態であれば考えが深まったと言えるのか、児童自身に意識させたり、共有したりできるようにしていきたい。

三 指導助言

仙台市立東長町小学校長 田中 孝子 先生

○教材文の解釈を通して、学習者が自分の力で教材文を読む力を獲得することができるようになる。「何を知っているか」から「知っていることを活用して何ができるのか」への移行が授業に求められている。

○スタディ・ログの実践で、毎時間、児童にコメントを与えることにより、まとめ方に改善を加えた児童が見られた。レスポンスの大切さが評価される事例である。

○授業改善の視点である「深い学び」は到達点ではなく、見方・考え方を働かせた課題解決のプロセスを表すもので、それを自覚することで「深い読み」に到達できる。

【文責 三村祐子】

◆研究発表分科会⑤◆ 「読むこと」文学的文章・低学年

研究主題 子どもの思いでつなぐ文学的文章の授業

～二年生『スーホの白い馬』の実践を通して～

発表者 光市立浅江小学校 岡部 翔 先生

一 提案の概要

本県では、「読むこと(文学的文章)」においての深い学びとは、『書かれている内容やその面白さを理解するとともに、表現の効果や意図から自分の感想や考えを広げ深めること』であると捉えている。深い学びを実現するためには、子供たちがどのように教材と向き合っているのか、言葉による見方・考え方をどのように働かせているのかを見取る必要がある。その見取った子供の思いから、単元を貫く学習課題を設定し読み進めていくことで、主体的に教材と対話し、物語の内容や面白さを理解できるのではないかと考えた。また、子供の思いから表現の工夫に着目できるように教師が問い返すことにより、表現の効果に気付き、自分の感想や考えを広げ深めることができるかと考え、本テーマを設定した。

二 質疑応答

Qどの物語文でも使える、人物の関係や気持ちの変容を捉える可視化の手だてはどのようなものがあるか。

A 比喻や複合語を動作化させることは有効である。またICTの思考ツール(座標軸)で人物の心情を点で表し、比較・分類する方法がある。

三 指導助言

下松市立中村小学校 教頭 牧野 うつぎ 先生

①言葉の力で書く……教材の特性として、額縁構造の民話であること、人物が対象的に描かれていること、読後感のずれが生まれやすいこと、表現の工夫、などが挙げられる。

②子供像で書く……本単元でつけたい力は何か、これまで何をどのように学んできたか、これから何をどのように学んでいくのか系統性を意識して教材研究をする。

③教師の働きかけで書く……単元を貫く学習課題の設定の工夫がされていることがよい。一人一人の読みのずれを可視化することで、前の場面や友達の読みと比較し、対話が生まれていた。教師の問い返しにより叙述に立ち返ることができていたが、今後は話型を示し、児童自ら、どの言葉に着目した考えなのかを発言する習慣をつけることが、汎用的な読みの力に繋がっていくと考える。

【文責 油谷未央】

◆研究発表分科会⑤◆ 「読むこと」文学的文章・低学年

研究主題 低学年文学「精査・解釈」の学習デザイン

～(なる)活動が育む創造的想像力～

発表者 熊本大学教育学部附属小学校 溝上 剛道 先生

一 提案の概要

私たちに求められるのは、自身の身体感覚や経験に接地した言葉で、情報を精査・解釈する具体的な想像によって、自分なりの意味や価値を見出していく力だと考える。(なる)活動を土台にし、具体的な想像を促す学習環境や学習プロセスとして単元を構想した。主張①「演じて、語って、また演じる」という学習過程により、「感覚↓言語化↓感覚」という実践を伴った具体的な想像のプロセスを生み出す。主張②(なる活動)から生じた空間の広がり、時間の流れに対する読みのずれについて、実演しながら全体で検討する場を設けることで、具体的想像の視点を更新していく。主張③活動のまとまりごとに『スイミーあかね』を書く活動を設定することで、一人一人が(なる)活動で感じたことを言語化したり図化したりできるようにする。

二 質疑応答

Q 精査・解釈の前段階の構造と内容の把握はどのように捉えているか。

A 具体的にイメージすることを、精査・解釈と捉え、登場人物、幕分けなどを構造と内容の把握と捉えた。別々の物ではなく、重なりがあって、グラデーショナルになっていると考える。

三 指導助言

熊本市立楠小学校長 井上 伸円 先生

子供たちが友達と対話をする意味は、他者の読みと自分の読みとの違いに気付き、新たな読みに気付くことにある。低学年では、友達や教師と言葉を交わしながら自分の考えをはっきりさせていく。物語の世界に入り込めるのが低学年のよさである。身体表現を通して理解させたい。

本発表では、(なる)活動を通して、スイミーの世界の時間や空間の広がりやに気付いた。また、演じることで生まれる疑問や発見により対話が生まれた。(なる)活動と(語る)活動の行き来の中で、教材文にどう戻すかが重要である。教材文が確認できること、活動できる広さがあること等の学習環境を整える必要がある。振り返りでは、どの叙述から考えたかを明らかにすることで話し合いがより活発になる。子供たちが自ら問いを生み出したときに、深い学びとなると考える。

【文責 油谷未央】

◆研究発表分科会⑥◆ 「読むこと」文学的文章・中学年」

研究主題 児童が主体的に読みを深める学習指導の工夫
～児童が作る「単元計画シート」の活用を通して～
提案者 山陽小野田市立高千帆小学校 光井 理恵子 先生

一 提案の概要

予測不能な時代をたくましく生きる子供たちを育成するために、自ら課題を見付け、主体的に読みを深める学習指導の工夫が必要である。そのため、本実践では手だてとして以下の二点を行った。

① 児童「が」作る単元計画シート

物語の魅力を伝えるためには、自分たちが魅力に気付かなければならない。初発の感想や疑問の中から、どのような学習を積み重ねていくべきなのかを考えさせた。自分たちが作り上げた計画に沿って授業が進むため、主体的・意欲的な学びにつながったと考えられる。

② 「問い」の吟味

児童が教材と向き合い考えを深める「問い」について、選択肢を示したり仮説を立てて話し合ったりする「問い」が効果的であった。そういう「問い」が全員参加の学びにつながったと考える。

二 質疑応答

Q 計画を立てる際の詳しい手だてとは

A 「「こんぎつね」では、本文後ろの手引きを活用し、要点を児童と確認した。「プラタナスの木」では、必要によって手引きを活用する児童がいた。

Q 場面ごとではなく、全体を読むことの良さは

A 次時への意欲が湧かなかった自身の経験や、比較するからこそ分かるおもしろさを実感した経験等から、「貫く」ことが大切だと実感した。

三 指導助言

山陽小野田市立須恵小学校長 間恵 満貴 先生
「単元計画」や「問いの吟味」は汎用性がある。他の文学的文章や他教科の学習においても活用することができる実践であった。価値ある沈黙を創り出すための主発問や切り返し発問ができれば、子供たちにとって実りある授業となる。今後も、教材の構造を踏まえ、作者が意図的に仕組んだ言葉に児童が読者としてこだわりながら読む授業づくりを通して、「深い学び」につなげていくことが重要である。

【文責 姉川愛永】

◆研究発表分科会⑥◆ 「読むこと」文学的文章・中学年」

研究主題 場面のうづりかわりと結びつけ、登場人物の気持ちの変化を
読もう ～解き明かそう！～ さんの最後の思いとは～
提案者 世田谷区立尾山台小学校 本條 禎之 先生

一 提案の概要

進んで学習に対する考えを深め、身に付けた言葉の力を日常生活で生かそうとする自立した学習者を育成するために、身に付けるべき力を子供たち自身の自覚と主体的な学習が重要であると考える。そのため、本実践では手だてとして以下の二点を行った。

① 読みの観点の共有

「言葉による見方・考え方」を具体化し共有することで、教師自身が児童にどの叙述に着目させ、どのように考えさせるのが明確になった。

② 学習課題の工夫

主発問を問いの形式にすることで、ごんの気持ちの変化をより具体的に、深く考えることにつながった。また、揺さぶり発問により思考を活性化させることで、多様な考えに気付くことにつながったと考えられる。

二 質疑応答

Q 読みの観点に着目した授業とは。

A 児童自身が、どの叙述に着目し、その言葉からつくった考えかを、整理しながら言葉と言葉を結び付けていくことを自覚する授業である。

Q 読みの観点をどのように子供たちに伝えていくのか。

A 子供たちの言葉から読みの観点に着目しているものを教室に掲示する。毎時間積み重ねていくことで、学習の足跡が分かる。

三 指導助言

全国小学校国語教育研究会顧問 清田 浩文 先生
教科書会社による違いや改訂による変化等にも着目しながら、単元目標を教師自身が理解しておく必要がある。教材文には立ち止まらせた言葉が多くある。そのため、教師が言葉にこだわり、登場人物の言動や背景、作者についても教材研究することが必要である。言葉に着目させるための手だてにより、子供たちが作者の意図に気付くことや、言葉による感じ方の違いを実感できるようにする。また、深い学びにつなげるためには対話が非常に重要であるが、書くことによる自分との対話も重要である。

【文責 姉川愛永】

◆研究発表分科会⑦◆ 「読むこと」文学的文章・高学年

研究主題 あの子が学んでよかったと思える文学的文章の学習をめざして ～『大造じいさんとガン』等～

発表者 防府市立華城小学校 村本 涼 先生

一 提案の概要

○大規模校の学級において、児童の学びの姿が見えづらくなる経験をもとに、対象となる「あの子」（本実践ではF児）を一人想定し、児童の思考の流れを意識した単元づくりを行った。

○子供たちの発達段階及び実態に合わせ、研究仮説として設定した「言語内容の問いを、言語形式への気付きで答える課題・発問」から「言語内容の問いを、言葉を根拠に考える課題・発問」に変更し、言葉をヒントに考えることをキーワードにして授業を行った。

○一人の児童の発言について、全体で吟味することを促す問い返しをすることで、一人の発言の価値を全体に広げ、共有した。

二 質疑応答

Q子供が文章を読んで理解するために、どんな手だてをしたか。

A大造じいさんの作戦の名称を伝えた上で読み聞かせを行い、難しい言葉や児童になじみのない事柄はパワーポイントで提示した。

Q対象児童であるF児の実態を知りたい。

A授業ではいつもあまり発言しない児童。本実践を通して、相変わらず発言は少ないが、ノートにはたくさん意見を書くようになった。

Q見取りの質を高めるために、どのようなことを考えているか。

A教師が見取ろうとする姿勢が大事。教材研究で、児童の発言にどのような価値があるのかを分析することや、どの場面で表現させるか（書かせるか）ということも重要と考える。

三 指導助言

美祢市立秋吉小学校長 吉田 睦美 先生

○なぜ教室で読むことが大事かという点、共に同じ物語を読む仲間がいることで、一人の読みでは見えなかったことが見えてくるから。

○消極的だったF児が、言葉に対して積極的にわかかわるようになった。児童の声を発端にして授業を仕組むという視点が素晴らしい。

○「だって」が仕組まれているのが物語の授業。「だって、ここにこう書いてあるじゃん。」と言うときの「だって」。自分と違う「だって」を聞いたときに、自分が納得できる言葉が語られれば、もう一つ読みを獲得していく。そんなやりとりが教室でできるとよい。

【文責 大田晃司】

◆研究発表分科会⑦◆ 「読むこと」文学的文章・高学年

研究主題 自らことばに向き合い自分のことばで表現する子供の育成をめざして ～『大造じいさんとガン』の実践から～

発表者 京都市立御所南小学校 塩見 美穂 先生

一 提案の概要

○自ら課題を追究したいと思えるような導入の工夫として、既習の文学的文章をもとに、物語の魅力をもとに「人物像」「人物の相互関係」「話の展開」「表現」の四つに分類した。初発の感想で自分が魅力を感じたところを中心に読みを進め、ペアやグループで考えを交流した。

○複数の情報に関連付けるための工夫として、教材文を拡大した全文提示や、手元で読める全文シートを活用し、考えを書き込んだり、言葉を線でつないだりした。場面をつなげて考えたり、物語の全体像をとらえたりするのに有効な視覚支援となった。

二 質疑応答

Q追究・表現する四時間の各一時間の具体を知りたい。

A自分が読み進めたことをペアや四人グループで交流した。交流で解決できなかったことやみんなに聞いてほしいこと、指導者が考えてほしいことを全体で交流し、共有した。

Q全体の交流の質をどのように高めていくか。

A振り返りで、交流を通して友達から学んだことや、自分の考えの深まりや広がりを書くようにし、教師が価値付けて広げること高めた。

Q教師が子供たちに考えさせたい「問い」は何か。どこで問うか。

A初発の感想に「なぜ残雪をうたなかったのか」という疑問をもつ子が多かった。その点を友達との交流を通して、はっきり解決できない「問い」として焦点化し、子供の意識を高めた上で全体で共有した。

三 指導助言

京都市総合教育センター指導主事 高田 裕宇 先生

○学習指導要領国語のC読むこと（1）カ「文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げること」に重点を置いた実践。

○既習教材を使い、「大造じいさんとガン」の魅力は何かという大きな「問い」に向け、子供が主体的に取り組みたくなる単元構想が秀逸。

○深い学びにつながるために「育成する資質・能力は何か」「言語活動は資質・能力の育成につながるためか」「言葉による見方・考え方を働かせているか」「児童にとっての問いはあるか（試行錯誤できるか）」の四つの視点で授業を見ていきたい。

【文責 大田晃司】

【令和六年度 全小国研 第二回理事会報告】

令和六年度 全小国研第二回理事会が、十一月二十八日(木)に山口市内にある「KDDI維新ホール」において開催された。会長挨拶、開催地代表挨拶、名誉顧問からのメッセージ、そして報告及び審議が行われ、左記の事項について報告と承認がなされた。

一 令和六年度中間会務報告

第三十四回夏季実践交流セミナーについて

〔日程〕令和六年八月一日 〔会場〕墨田区立第一寺島小学校

○会長挨拶、全国小学校国語教育研究会の歩み、全国大会案内に続き、教師による模範授業と授業考察が行われた。

〔テーマ〕物語を選んで読み、心に残ったところを説明しよう

・模範授業者 福岡教育大学附属福岡小学校教頭 大村 卓也 先生

・助言者 東村山市立久米川東小学校長 西川 さやか 先生

○四つの分科会に分かれ授業実践発表・協議会

○特別講演

〔演題〕学習指導要領の趣旨を実現する国語科の授業づくり

文部科学省初等中等教育局教育課程課

国立教育政策研究所 教育課程調査官・学力調査官

大塚 健太郎 様

三 感謝状・教員表彰の贈呈について

全国小学校国語研究所の研究について

四 今後の全国大会の開催地について

・ 山口大会 ・ 宮城大会 ・ 東京大会 ・ 大阪大会

五 令和七年度 第五十五回宮城大会について

各都道府県・政令指定都市の国語研究情報報告

六

七

〔総会〕

理事会終了に引き続き、総会が開催され、理事会で承認を得た感謝状・教員表彰の贈呈が行われた。

〔感謝状〕

山口県小学校教育研究会国語部

〔教員表彰〕

熊本大学教育学部附属小学校 溝上 剛道 主幹教諭

【全国小学校国語研究所の研究発表会報告】

全国小学校国語研究所は、全小国研の付属機関として創設から十六年が経過しました。その間、全小国研の研究理論と研究構想に基づき、研究を積み重ねてきました。創設以来、毎年一回、研究発表会を開催しています。本年度も、令和六年十一月十六日(土)に東京都中野区立教育センター「みらいステツプなかの」で、研究発表会を行いました。

研究主題は、「言語能力」の育成を目指す国語科指導法の研究、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を基盤とする授業づくりを掲げ、教育現場で役立てて頂ける不易の実践的研究を目指して研究活動を推進し、研究成果を研究紀要にまとめました。紀要には、研究所の研究と全国研究協力委員の実践論文(十三名)とを合本し、作成しました。

当日は、研究理論や研究構想についての発表、研究主題に迫るために、二つの分科会(第三学年『ありの行列』、第五学年『想像力のスイッチを入れよう』)で、「参加者交流型模範授業」の授業提案を行いました。次のような流れです。まず学習過程の課題設定・把握の段階では、驚きや感動を基に「問い」をもち、学習課題を設定し、学習計画を立てること。次に、課題追究の段階では、分かったことや筆者の考えの根拠を捉え、自分の考えをまとめること。最後に、まとめ・発展の段階では、考えを伝え合うこと。会場の和やかな雰囲気の中、参加者同士が活発に意見を交わしながら、作業に取り組んでいました。「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実とは、往還を原理とした授業づくりが重要であることを実感しました。

最後に、文部科学省初等中等教育局教科調査官 大塚健太郎先生の記念講演「小学校国語科における学習指導要領の趣旨の実現のために」を指導上の課題と求められる改善のための視点があり、さらに、研究の充実を図るための新たな意欲が沸き上がりました。(副所長 福本 菊江)

第五十五回宮城大会に向けて

宮城大会実行委員長 片岡 有吾

いよいよ今年の十月、全国小学校国語教育研究会を宮城県で開催いたします。本県における開催は二回目、前回は三十四年前です。そしてこの大会を引き起こすことになったのは、六年前の令和元年、「コロナ禍」以前の事です。この間、日常生活や教育活動が予想をはるかに超える大きな影響・制限を受けたのは周知のとおりです。しかしながら、この大会のための歩みを地道に進めてきました。

大会の準備・運営に係わっているのは、宮城県連合小学校国語部会並びに仙台市小学校教育研究会国語研究会です。この二つの組織は、これまで「国語教育研究紀要」（通算六十一号）、「作文宮城」（通算七十三号）の編集・出版に取り組み、継続してまいりました。中学校、高等学校と連携し、準備委員会を立ち上げたのは令和四年のことです。令和七年度は、奇しくも中学校政令市大会（全国）、高等学校全国大会、そして東北大会（小・中・高共催）と国語の大会が全部で四つ重なりました。宮城では、これまで三つの校種が連絡を取り合い、実践・研究を積み上げてきた経緯から、大会主題を「小・中・高をつなぐ国語教育の創造く学びの深まりをめざして」といたしました。ここまで宮城教育大学教授 児玉忠先生、秋田大学名誉教授 阿部昇先生にご指導ご助言をいただくとともに、二日目の会場となる小学校で研修会、指導案検討会、授業研究会などを重ねてきています。

本大会、一日目（トークネットホール仙台）の開会行事では、基調提案に引き続き二つの記念講演を予定しています。一つ目は、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 国立教育政策研究所教科課程調査官・学力調査官 大塚健太郎様のご講演です。二つ目は、東北大加齢医学研究所 教授（医学博士） 川島隆太様のご講演です。川島先生は、地元宮城の大学で脳科学・神経科学の立場から長年、研究を継続され、「子供の成長・発達」や教育や学習などに係る多くの研究成果を発表されています。二日目は前述のとおり二つの小学校（仙台市立南光台小学校・同富沢小学校）にて行います。午前中は、それぞれ六つの授業、計十二の授業を公開いたします。県内の小学校からの持ち込み授業も予定しています。午後は三領域を設定し、県内外の計十二名の方が実践提案発表を行います。

宮城で多くの「学び」を持ち帰っていただくのはもちろんですが、豊かな自然、海の幸、山の幸、そしておいしいお米やお飲み物も堪能していただけるよう、皆様をお待ちしております。

全国小学校国語教育研究会 ホームページについて

全国小学校国語教育研究会では、一昨年度の秋より、ホームページを開設しております。当初は、全小国研のホームページと各研究会のホームページとのリンク貼ることを主な目的としていましたが、各研究会で配布をしている案内等を簡易に全国小学校国語教育研究会のホームページに掲載できるようにしました。つきましては、左記の要領で全国小学校国語教育研究会のホームページに掲載することができまますので、特段のお取り計らい方、よろしくお願い申し上げます。

一 掲載方法

・掲載したい文書等をPDF化して、左記までメールでご送付ください。

メールアドレス：zenshokoken@gmail.com

二 掲載枚数と変更・更新の回数

・特に枚数や更新回数の制限はございません。

三 掲載期間

・原則として掲載した年度の年度末までとなります。

四 掲載場所

・全国小学校国語教育研究会ホームページのトップページの都道府県名からリンクを貼ります。都道府県名をクリックするとPDFが表示されるようになります。

五 提出締め切り

特に締め切りはございません。メールをいただければ、随時対応いたします。ただし、データをいただいてから掲載するまで、だいたい二週間程度お時間をいただくこととなります。

六 問い合わせ先

事務局長 高橋 誠人 （墨田区立第一寺島小学校 校長）

電話：03-3614-0103

Mail：zenshokoken@gmail.com